opusdei.org

黙想の祈り:復活節 第6主日(B年)

黙想のテーマ:「互いに愛し合う」「神は私たちを決して忘れない」「聖霊に導かれて」。

互いに愛し合う

神は私たちを決して忘れない

聖霊に導かれて

「父がわたしを愛されたように、わ たしもあなたがたを愛してきた。わ たしの愛に留まりなさい|(ヨハネ 15,9)。これは、ご受難を前にしたイ エスの、弟子たちへの遺言です。こ の時、しばらくすると、弟子たちが ご自分を置き去りにすることを知っ ておられました。しかし、裏切りの 苦しみの後、使徒としての生活を生 かす糧にしようと、彼らの心に熱意 を燃え立たせることを望まれたので す。「もはや、わたしはあなたがた を僕とは呼ばない(…)、私はあなた がたを友と呼ぶ | (ヨハネ15.15)。私 たちの自由の応答が必要であるとは いえ、この素晴らしい友情の発案者 は主なのです。一人ひとりに愛情深 いまなざしを向け、私たちをお選び になりました(ヨハネ15.16参照)。な ぜなら、先ず「神がわたしたちを愛 した | (1ヨハネ4,10) からです。

「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である」(ヨハネ15,14)。これが、主のうちに生き、主との友情を決して失わ

ないための秘訣です。イエスはその 手がかりを示されました。「わたし があなたがたを愛したように、互い に愛し合いなさい。これがわたしの 掟である。友のために自分の命を捨 てること、これ以上に大きな愛はな い」(ヨハネ15.12-13)。彼らは、主 がどのように愛されたかを直接見ま した。使徒たちは一人ひとり、主が 直接示された多くの細やかな配慮を 語ることができたでしょう。また、 主が、近づく人々に愛情深く忍耐強 く接しておられたことも話すことが できたでしょう。使徒たちは、皆に 関心を持っておられるイエスの姿を 見、知っていました。

痛ましいご受難の始まった夜、主は、弟子である私たちが実行するよう招かれている、新しい<愛の掟>を制定されました。それはキリストが十字架で示されたような愛です。「今や愛はもはや単なる『おきて』ではありません。神は、愛のたまも

のをもってわたしたちを迎えてくだ さいました。愛とは、この愛のたま ものにこたえることなのです | ™。 さらに、神ご自身が、この愛の福音 を世界に広めるようにと私たちを送 り出されるのです。「あなたがたが 出かけて行って実を結び、その実が 残るようにと、わたしがあなたがた を選んだ | (ヨハネ15,16)。主のよう に愛することができる時、つまり、 他者のために生き、主の喜びを、友 人・知人に伝えつつ過ごすとき、私 たちはこの使命を果たしたことにな ります。それは、「私の喜びがあな たがたのうちにあり、あなたがたの 喜びが満たされるためである|(ヨハ ネ15,11)。

「神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます」(1ヨハ

ネ4,16)。聖ヨハネは神の本質をこの ように定義付けます。「たとえ、聖 書の全ページが愛の賛歌で、耳にす ることが『神は愛』という聖霊の言 葉だけであったとしても、それ以外 のことを求めるべきではない 1 [2] と、聖アウグスチヌスは言います。 信仰の歩みにおいて重要なことは、 私たち一人ひとりに対する神の不滅 の愛を信じることです。「わたした ちは神の愛を知っています。このこ とばによって、キリスト信者は自分 の生活における根本的な決断を表す ことができます | 図。ある意味、主 は、私たちを愛さずにはいられない と言う<弱点>をお持ちだと言えま す。

主の友として、主と共に、主において生きるようにと招かれている私たちは、「主によって生きるように」(1ヨハネ4,9) なるのです。私たちは使徒たちと同じ経験をします。主から目をそらし、主の愛を忘れると、

自身を見失い、枯れた枝になってし まいます。主に近づき、主の胸に寄 りかかる使徒ヨハネのように、その 聖心に寄りすがることが必要です。 一多くの場合、弱さから─主をない がしろすることがあったとしても. 復活後、弟子たちになさったよう に、主は大急ぎで私たちを探しに来 られます。「神は私たちのことをあ きれ果てたやつだと憤慨なさること はありません。私たちの度重なる不 忠実な行いにうんざりなさることも ありません。自ら進んで御腕を広げ 恩寵を与えてくださるほど慈悲深い 御父なのですして。

復活節の終わりが近づいています。 典礼は、今日から、イエスが弟子た ちに約束された聖霊降臨を待ち望む ものになります。御子は御父のもう に帰らなければなりません。もう彼 らの視界からは消えてしまいます が、庇護者なしで彼らだけにするの ではないので、心配しないようにと 断言されます。「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、わたしたなるとを教え、思い話したことをとことでとくださる」(ヨハネ14,26)。キリストと共に過ごした素晴らしいる年間の後、主の不在は、聖霊のをません。またのも、不可能でしょう。

復活節の間、ミサで読まれた使徒言行録は、聖霊降臨後の福音宣教の歴史を述べています。生まれたばられておける、聖霊の素晴ら事れてられないます。と表わされてといます。と言いないます。と言いないます。と言いないは、力強い言葉をかけると同時に聴衆の心にも働きいいてといると同時に聴衆の将来について

の諸決断をリードし、使徒たちの進 むべき道を示し、導き、彼らを鼓舞 したり引き止めたりしました。その 愛は、喜びであり、迫害されている キリスト信者に確信を与えました。 キリストの心を満たしていた聖霊 は、主の<友人>の心にもあふ、 神の知恵を授けていたのです。聖霊 は彼らを励まし聖化しました。

聖霊降臨は、ある日曜日、エルサレ ムで起こっただけの驚異的な出来事 ではありません。古代教会の全生活 を満たしていた聖霊は、今も教会 を、そして私たちの心を導き続けて おられるのです。コルネリオの回心 のところでは、聖霊がペトロを百人 隊長の家に導いています。「<霊> がこういった。『三人の者があなた を探しに来ている。立って下に行 き、ためらわないで一緒に出発しな さい。わたしがあの者たちをよこし たのだ』(使徒言行録10.19-20)。そ の家でペトロが話していると、霊の

聖霊は、神の賜であり、私たちの愛とキリストに仕える望みを新たさせるでくれます。それは愛を成長いけるであるです。その訪れは、ったその愛でり、下渉が強かが、そいよって、「ないないと希望が若返ります。今日、高りにそれをした。今日、ミサの等のよります。今日、ミサの場である。

祈願では、復活の神秘が「私たちの 生活を改善し、私たちの振舞いに表 れる」ことを神にお願いします。聖 母マリアに、私たちが聖霊の庇護を 確信して御子のもとに〈留まる事〉 を教えてくださるようお願いしま しょう。

[1] ベネディクト16世、回勅「神は 愛」1番。

[2] 聖アウグスチヌス、ヨハネ書簡の解説。

[3] ベネディクト16世、回勅「神は 愛し1番。

<u>[4]</u> 聖ホセマリア、『神の朋友』64 番。 pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-fukkatsusetsu-shujitsu6/(2025/12/16)